

源氏物語の人物造型

森 一 郎

—

源氏物語研究において、作中人物論が重要な一分野を成していることは、それ自体源氏物語が、今日のわたくしたちの鑑賞と批判に耐えうる文学性を有することのあかしだと言える。

源氏物語を近代小説と同一視してはならないということは当然の反省であるが、それは、源氏物語の今日的な文学性を否定するべきものではない。

しかし、文学、といっても、一定一律のものではなく、多様な観点を要請するのであって、今日のわたくしたちの文学概念の視界の中に入るもののみを文学、だと考えるべきではない。

源氏物語の文学、を論ずるからには、源氏物語という作品自体が語りかけてくる文学、に開眼すべきなのである。

源氏物語は物語であって小説ではない、という論は、源氏物語を、現代人の鑑賞と批判から遠ざけるひびきを与えるのかもしれないが、それは、けっして源氏物語の文学、を否定する論であるはずがない。

それは、源氏物語という作品へ一定的に小説文学としての観点を投入することのあやまりをついたものだと考える。

源氏物語という作品が内在する文学、という作品のいのちは、その成り立つ基盤、様態ときりはなしては、正しくつかむことができないことを言ったものと解する。

源氏物語の文学、は、源氏物語の世界の論理・方法に即することによってのみ、わたくしたちの前にひらけてくるのである。

したがってまた、源氏物語の「文学」が、たまたま近代小説の「文学」と通ずるにおいては、小説的な視点から、文学としての評価を加える方法が、必ずしも源氏物語の世界の解明に役立たないわけではないのである。

いわゆるモデル論にしても、私小説風な視点ではあったけれど、源氏物語の世界の解明に役立たなかったとは言えない。

作者の自画像、理想像を、作中人物にさぐる方法も真実性を持たないわけではない。

源氏物語であろうと近代小説であろうと、それを制作したもののねがいやいのちがこめられたことにはかわりはない。

人物論に限って言えば、近代小説の造型方法に近似するもの、つまり、人物の性格の必然をその運命の上にとどりうるもの、たとえば、宇治の女君たちについてなら、人物が作品の主題をになう近代小説の視点からの考察もかなりののみりを期待しえよう。

性格悲劇と呼ばれる第三部の世界の進め方が、人物の運命の必然を促したのだが、それが、近代小説の必然性を重んずる世界・方法に通じたのである。

しかし、源氏物語も近代小説も、作者のねがいやいのちがこめられたものに相違はないとしても、その間の事情は無差別に同じではない。

近代の自我・個我の意識・主体の発し形成する主題は、作者自身の思想・観念の直接的な発現と見なしうるが、源氏物語のばあい、主題の問題を制作主体一個に結びつけることには疑問があること既に反省されているところである。

作者の自画像・理想像ということ、つまりは作者の思想・観念と作中人物の結びつきを単純には行ないえないことも反省されている。モデル論も同断。私小説のように作中人物と実在人物とは結びつかない。

小説的な視点は、物語の世界と小説の世界が共通する接点で効果をあげつつも、限界を露呈したわけであった。

宇治十帖の姫君たちについても、たとえば浮舟の性格の必然をその運命にたどりうるとしても、その登場が、大君の形代として要請されるまでは、全然見られなかったことなど、小説における構想と人物の連関とは異質と言わなくてはならない。主題に随伴して人物の登場せしめられる源氏物語の方法的特徴を見のがすことはできない。

小説的な視点からする考察は、たまたま源氏物語の世界が小説の世界と近似する部面では、何なく効果をあげる。が、それは、たまたまにすぎないのであることを知らねばならない。

恐ろしいのは、源氏物語の方法への意識の欠如によって、源氏物語の世界が小説の世界と大いに異質な部面に目をふさぐことである。

人物の造型が、現代の小説の視点からではその脈絡のたどれぬことあるときも、何とか意味の必然性をつけようとすることは、作者のおし進め、おしひろげていく物語の世界の方法に忠実な態度ではない。

物語の研究は、物語の世界・方法に即さねばならぬ。

たまたま小説的な世界と合致するものでも、物語としての観点の中につつまこまねばならぬ。何故なら源氏物語は物語であって小説ではないからである。方法は対象から導き出される。

小説的な観点は、源氏物語という作品への異質な観点であることは、小説対物語という大きな対比において言える。が、源氏物語を物語としてみるという観点においては、たとえば物語をおとぎ話と規定する一定的な観点を排除することは可能でなくてはならない。

物語はおとぎ話だ、という規定は、源氏以前のいわゆる昔物語に対する観点でなくてはならぬであろう。それは、そのまま源氏物語への観点とはならない。源氏物語は、昔物語から脱した「文学」としての物語だと考えられるからである。

かくて、源氏物語は物語だ、と、それだけの言葉では、へんてつもない言い方ながら、源氏物語独自の文学世界を開発する志向をこめて、主張したいのである。

源氏物語独自の文学世界といっても、小説的世界・方法と通ずる部面は多々あろう。しかし、だからといって、小説的視点でよいのだと思わないようにつとめたいのである。

くどいようだが、小説的視点からの考察でも源氏物語の文学世界は解明しうる面を持っている。それを否定するわけではないのである。

だが、それは、対象に即した方法論として全的ではないことを反省したいのである。

また、一方、物語はおとぎ話だとか、物語は所詮物語にすぎない、といったふうに、価値的に低く見て、あるイメージの中にとじこめることもしたくない。

源氏物語のもつ多様な性格を一定的に限定することなく、多様に開発することこそ、源氏物語研究の志向すべきことであるにちがいないからである。

源氏物語の有する文学性は、小説に通ずる点でいのちの光をはなつだけでなく、物語の特殊性においても輝くであろう。というより、特殊性のいのちを享受していくことが、源氏物語研究の進むべき道であろう。

そもそも人物論が成立した文学性というのが小説的であったから、人物論というと、小説的世界と通ずる部面でなされ、そこに文学としてのいのちを見出す方向が主流である。

そのことの意義を没却するのではさらさらないが、物語を物語としてみるものがたいせつな以上、人物論、人物のリアリティの発見、把握も、今までやってきた路線の方向途上ばかりでない道を探求しなくてはなるまい。

つまり、以上でお分りいただけるように、源氏物語を物語としてみるということは、源氏物語を文学としての観点からみないことを意味するのではなく、小説としての文学世界をみる視点をもつつみこんで、源氏物語の有する多様な文学性を、なかんずく物語としての特殊な文学世界を探求することを志向するものなのである。

だからまた、人物論だけが志向としてあるのではない。

ただ、今は問題を人物論に限って述べるわけである。

二

(イ)

最近、源氏物語の人物造型に関する研究への反省や展望がなされ、源氏物語研究の一分野として豊かな展望を得るにいたったことはまことに喜ばしい。

「源氏物語作中人物論集大成」という特集が「解釈と鑑賞」昭和38年8月号でなされたりしたが、最近、清水好子氏の「物語作中人物論の動向について」（筑摩書房刊「国語通信」昭和40年8月号・特集・物語文学）や、秋山虔氏の「源氏物語の人間造型」（学燈社刊「国文学」昭和40年12月号所載・10月9日、国文学講演会、講演要約）において、それぞれ異なる立場に立ちつつも、人物論を、作品論の領域における重要な一分野として意義づけられたことは、わたくしたち後学にとって有難く有益であった。

秋山氏は、近時その業績をまとめて出版された「源氏物語の世界」（東大出版会刊）所収の「源氏物語における人間造型の方法」の諸論文が示すごとく、戦後の源氏物語人物論の一歴史をつくられた方であり、自らの御研究への省察をこめて、人物論という作業の未来によこたわる「沃野」を指し示され、後学を励まされること多大であった。

清水氏は、戦後の源氏物語人物論の分野において自らもすぐれた業績をうち立てられた方であるが、戦後の源氏物語人物論の動向を、今井源衛氏、秋山虔氏、益田勝実氏の諸論文を中心として考察され、批判された。

両氏が言われているごとく、源氏物語の作中人物論が源氏物語研究の重要な一分野として、作品研究としての市民権を獲得したのは戦後である。

さて、戦後の人間性回復へのねがい、民主主義精神のほうはいと波うつ中で情熱をこめてなされた新しい研究意図や方法は、当の今井氏や秋山氏の反省がつとになされているごとく、作品の有する方法に即さねばならぬ、という作品研究の方法論上の自己批判を生むにいたった。

近江君や末摘花というようなみじめなイメージを持つ人物が、とりわけ照明をあてられたこと、明石上や玉鬘、浮舟を身分階層の上で受領層出身の身分の低さに苦しむ者としてとらえられたことは、確かに戦後の源氏研究の新しい

い開拓として認められねばならない。

が、清水氏が言われるごとく、問題はその書き方への認識である。これらの人物への同情が、その理解と認識を高める一方、民主的同情の投入がそのまま一個のイメージを形づくり、作品における人物の書かれ方と相容れぬ傾きにまでつっ走ってしまったことは、何としても根本的に反省されねばなるまい。

いけないのは、民主的同情なのではない。自らの主観に発した一個のイメージを、作品の世界に投入してしまうことが、いけないのである。

小説的視点がつよく反省されるべきだとするのは、こうした傾きにおちいりがちな方法上の欠陥を具有するからである。

激情的な民主的感情の、作品へのそのままの投入は、戦後二十年の時代思潮の推移も相まって冷静となったが、近代小説的心情の投入は、小説が文学の主軸であることをつづける限り、今後も続きやすい。

しかし、それでは、作品研究としての前進はなく、作品論としての高まりへの志向の無自覚が批判・反省されねばならないのは言うまでもなからう。

源氏物語は近代小説とはちがう、という当り前のことを強調せずにいられないゆえである。

もっとも、秋山氏が言われるように「近代文学の小説に接する態度で接することによって、かえって小説的観念をはねかえす物語の特性がはっきりしてくる」¹⁾と言える。

が、たいせつなことは、「物語の特性」、物語の独自性をはっきりさせようという目的意識であろう。

「わたくしたちの人間について文学についての関心をおっつけるところから、すべてが開始する」²⁾のであるが、物語の特性をあきらかにしようという念願がやはり前提となるのだと思う。

そうした点で誰も異論はないはずだと思うし、従来もこの目的意識の必要は強調されてきた。

わたくしが、拙稿「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」

1), 2) 秋山虔氏「源氏物語の世界」(東京大学出版会刊) 5頁参照。

(「国語国文」昭和40年4月号)においてささやかな考察を試みたのも、そのねがいがいによる。

清水氏、秋山氏ともに拙稿をとりあげて下さったが、両氏がとりあげて下さった過大なお扱いに比して、拙稿のまとめ方はささやかであったことに忸怩たる思いである。まとめは十分でなく、論も過渡的である。第一部・第二部・第三部の相違・進展についてもふれていない。その意味で、題の大げさなわりには内容は全体にわたっていない。(根本的には変りはないが。)

これは、実は拙稿の執筆事情にもよるのである。

拙稿の執筆事情など書いてもはじまらぬことだが、しばらくおゆるしをねがいたい。

わたくしは、先に拙稿「源氏物語第二部の主題性について——女三の宮降嫁の事件——」(「国文学攷」昭和35年5月号)および拙稿「女三の宮事件の主題性について——柏木との事件に関する一考察——」(「国語国文」昭和35年11月号)において、若菜巻の主題についてふれるところがあった。すなわち、若菜巻は、二つの主題に二分されること、若菜上巻の終り近くから、それまでの(若菜上巻以来の)主題とは異質な、新たな主題が継起的に書き起こされたこと、両者はもちろん無関係ではなく主題の進展に連関を有するが、それぞれ別個に主題をみとむべきことを言い、それぞれの主題について考察を加えるところがあった。

ところが、女三の宮と柏木との密通事件が若菜上巻以降の主構想であるとする見方は、依然として多くの論者の有するところであるらしい。女三の宮降嫁もそのための布石であるとし、第一部の藤壺事件の因果応報、¹「罪と罰」に主題をみとめるのが一般のようである。

柏木の人物造型も、つとにそのための造型が用意されていると見るむきも少なくないであろう。

わたくしは、それに対し、前述の主張を、柏木の人物造型の面から論証しようとし、人物造型と主題との密接な連関をもつこの物語の方法に即して解明することにつとめたわけなのである。

そのために、第一部の諸例をあげて考察を加えた。その結果、柏木の例をもふくめて拙稿は、源氏物語の人物造型と主題との連関についての一つの方法を示す幾らかの例があがることになったと思えたので、内容に比して、おおけない題とは思ったが、思いきって「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」という題をつけたのであった。

そのため、柏木の人物造型についての分析と、その論証としての諸例の分析という点では、比較的完結的であるかと思うが、この大きな題目の意図する論述としては、拙稿はささやかであり、例証もあまねくゆきわたっていないのである。

ちなみに、石田穰二氏は「最近の源氏物語研究の動向」（「国文学」昭和40年9月号）において、拙稿の当面の論証の焦点である柏木の人物造型について評価してくださった。

清水氏、秋山氏は、わたくしが、柏木のことを論証するために、諸例をあげて、源氏物語の人物造型と主題との連関を考察したので、柏木をもふくめて、源氏物語全体に関する人物造型方法についての拙論への御高評を賜わったわけである。

拙稿の当面の意図は、柏木の人物造型のされ方に関するものであった。が、それとともに、拙稿執筆の動機には、源氏物語の方法——人物造型の方法——に即した方法的意識なしに人物にとりくんではならないということ、物語を物語として見なくてはならないというねがい、志向がはたらいていたことも事実である。そして、より根底には、人物造型についても、作者の語った順序を無視してはならないという、作品分析の立場、作品形象へのとりくみの主張がはたらいてもいた。

たとえば、柏木死後の夕霧の批評に「すこし意志の弱い所があって、柔和すぎた……」とあるのも、柏木死後に語られたものだとすることを忘れて柏木の人物造型・形象を語ってはならない。

伏線的に、たとえば、女三の宮の婿えらびの時などに語られるばあいとは意味が違うことを知らねばならないであろう。

達成された表現としての展開において作品の主題を考えると、後者のばあいなら、柏木の、密通事件のための人物造型がつとになされていることになり、密通事件という主題・構想の生起をそこに見出しうることになるのである。

わたくしが、ここで、「附着」ということを言ったのも、意志の弱さ、柔和さという性格の必然が事件を主導しているというふうを読むべきでないこと、そう読んでは、作者の語った順序、文学表現の構成を無視するもので、作者の方法に忠実でないことを言う気持がはたらいていた。

それは、あとから加えられた回想であることを注意したのである。そして、この書き方は、われわれの実人生のありようと似ていることを言い、源氏物語の方法は、人生の真実、ありように合致した方法ではないかと言及した。

人間の性格というものは、与えられた人生の場、局面において同一人物が違った像を浮彫りすること決してまれではない。源氏物語の方法は、そうした人間の生のすがたに即した方法であって、むしろ、近代小説の人物の必然を重んじた書き方は、作家の創作意図というわく内の、いわば、「かくぶちの絵の中の人生風景の必然性の追求」だとも言った。

近代小説は、そのため、作家の観念・思想がより多く人物に盛られることになる。

源氏物語第三部は性格悲劇だといわれ、また、近代小説的だともいわれるのは、薫や匂、大君や浮舟らの人物造型が、当初よりかなり明確な意図のもとになされていることと関係があろう。

こうした点でも、第一部、第二部、第三部は違うし、人物によっても違うことに当然注意がはらわれなくてはならない。(もちろん共通する点もある)。

秋山氏は、作中人物が、その人物らしいのちをもちはじめることによって、その姿勢が、作者の観念の中の筋立てを変改させ、また新たなる筋立てを生まずにおかない、というところに、源氏物語の人物造型の独自性があるとされ、そうした物語の世界の論理の進み方に大きく眼を開いてゆかなけれ

ばならない、と、強調された。

浮舟が、入水・出家後、薫を拒否する新しい形姿は、薫の今後に新しい変換をもたらす可能性を予想・暗示していると言えよう。そういったことがわたくしにも思い浮かんでくる。

そうした人物造型と構想・主題との連関のしかたを実証的に浮彫りしていくことが、今後の人物論という作業の課題であり、開拓さるべき沃野はそこにひらかれている、と指針を示されたことに、わたくしたち後学は深く感謝しなければならない。

(ロ)

ただしかし、拙稿の志向したことは、主題・構想に応じて人物造型がなされる、という、あたりまえみたいなことに注目したにとどまるのではなかった。

この、源氏物語の人物造型方法に注目することによって、人物の造型上の変化が、主題の進展・変化を示す信号のようなものに目される可能性を追求するにあった。

拙稿要旨に「人物の造型方法に着目することによって物語の構想・主題の解明も可能であることを論証しようとするのであつたのである」としてゆえんである。

もっとも、主題・構想の変化に注目しつつ人物の造型の変化を追求するのに対し、そのいわば逆が成り立つかどうかは、今後実証的に浮彫りすることが要請される。柏木について試みた拙稿の意図は、今後生かしてゆきたいと、考えている。

短篇的諸巻では、誰も主題を見あやまるものはない。しかし、長篇的巻々、たとえば、第二部の若菜上下両巻あたりでは、主題についての論も分れていること前述のごとくである。主題の変化や新たな発生を確実に言説できるために、人物の造型方法を細かく追うことの有効性を追尋すること、それが拙稿の当面の主たる意図であった。

主題・構想に応じて人物造型がなされるという源氏物語の人物造型の方法的特性の理解は、その他種々の問題の解明に資することができると思う。

最近、大林潤氏が、国文学攷第三十八号で、匂宮の出産記事に関して論じられたことは啓発されもし、意を強くもした。

匂宮の出産記事が懐妊後十八カ月目にしるされていることを指摘され、匂宮の出産のことは、柏木と女三の宮の密通事件を眼のあたりにする時で、密通事件の主構想の陰にかくれて、その出産記事がのぼされたものだと言われた。

そして、その出産がしるされたときも、母宮明石中宮の姿をのべるついでに、簡単にしるされたていのものであることにも注意された。

かくて、このような匂宮の描かれ方から、こうした時点の匂宮に対し、わたくしたちは、あの、のちの宇治十帖で活躍する主人公のイメージをさかのぼらせることはできないということになる。匂宮の、あの主人公としてのイメージは、作品形象の上で生起していないのである。

匂宮が主題に参加する役割をになって物語に登場し、物語の主人公としての役割を作者によって与えられたと考えられる時点、すなわち、匂宮によって形象化される主題性の生起は、横笛巻（日本古典全書四巻・二七九頁）で、紫上が格別かわいがるといふ記事あたりにさかのぼらせるべきか、といったことにもなるうか。

ちなみに、薫の誕生は柏木と女三の宮の密通事件という構想の中から生まれ出ただけに、その出産記事は克明であり、源氏が薫に冷淡ということもしるされている。（日本古典全書四巻・二三〇頁～二三二頁）。のちの、宇治十帖の薫の人物像の暗いイメージは、つとにこの出産の記事にさかのぼらせることができよう。したがってまた、主題の生起もこの時点に求めることができるのではあるまいか。

すなわち、薫の求道生活という、たしかに作者が追求を試みようとしたとおぼしき主題は、この出生の時点においてつとに胚胎していると考えることがゆるされるのではなからうか。

もとより、この限りで論が終ってよいのではない。宇治十帖における主題の中で、薫がになう役割、薫がになう主題性を解析するための「始発」にすぎない。匂宮も同じ。

今はただ、主題がどのように進められているかを微細に見つめていくために、拙稿の示した解明法が、何ほどかの有効性をもつのではないかということ を述べるために、その見通しをつけようとしたにすぎない。論証を期したい。

(ハ)

清水好子氏は、拙稿のポイントを、源氏物語の方法が作為的だということであると解されたようで、氏の論述はそうした方向で展開されている。

わたくしの意図は前述したとおりであるが、氏の論述はこれまた多大のみちびきと示唆を与えるものであった。

作者の意図する大きな筋のために人物の描き方はある限度内で変る。そして、その大きな筋は、光源氏という主人公を特別視する、主人公中心の精神、描き方によって規定されている。そこに作為の根源はある。

この大きなワクづけのもたらすものは誰しも否定しえないのではないか。

人物がその人物らしいのちをもちはじめ、作者の筋立てを変改させずにおかない、という局面は、けだし、この大きなワクの中でのことである。

だから、秋山氏の言われることとの間に別に矛盾はない。

また、前に、小説は作家の観念・思想というワク内での人生風景ということ を言ったが、物語には、主人公を中心に特別視するという、英雄の観念によるワクがあったわけである。

清水氏の秋山氏、今井氏、益田氏らに対する批判は、主として戦後間もない頃の諸論文に向けられている。人物論の動向の根源をそこに見られたからであるが、そのため、近時の秋山氏らの主張や実践・論文とはさしてその間に違いがあるとも思われない点も見られる。

わたくしが、人物の造型は主題・構想に随伴して変化すると申したことも、秋山氏が「けだし人物造型を追求することは、それを動かす物語、ここ

では巻々の論理がいかなるものかという考察と切りはなされてはならないことを主張したいのである」と言われたこととその精神において速ぎかるところははないのである。

ゝ作為的、とゝ必然的、との相違も、観点のとらえどころからきたもので、前述の英雄のワクを観点とするとき、源氏物語の人物造型は、およそゝ作為的、だと言わざるをえない。そうした大きなワクはさておいて、その人物の新たな局面での変貌を見るとき、それはゝ必然的、と映じてくる。

秋山氏は、頭中将の「添標」以後の変りかたは、作為的にとってつけられたようなものとしてかたづけられるべきでない、と言われた。

大きなワクをさておいて、頭中将の変貌を見れば、まさしくゝ必然、と映る。

頭中将と末摘花の造型のされ方が別個の因由をはらんでいることを明らかにされた氏の御指摘は鋭く、みちびかれるところ大きい。

それはそれとして、しかし、頭中将も末摘花も、人物造型が構想・主題の展開に対応してその主題にどうかかわるかによって決まるという点では両者とも変りはない。

わたくしが、頭中将・末摘花を例としてあげたのは、そうした共通する点においてであって、頭中将も末摘花も、光源氏という主人公中心、特別視の大きな筋立てにどうかかわるかによって、その人物造型は改変せしめられた。

ゝ作為的、と映ずるのはこうした点においてである。光源氏という主人公中心の筋立てのために、頭中将も末摘花も、同一人物とは思えない改変を加えられ、はなはだゝ作為的、であることにおいて両者に差異はない。

頭中将は、源氏の味方か敵かという筋立てのために改変させられた。末摘花の蓬生巻での描かれ方も、源氏への誠実ということに因由がある。

ゝ作為的、とゝ必然的、構想・主題に奉仕せしめられる人物造型という見解と、人物のいのちが、新しい形姿をもちはじめることによって作者の観念の中の筋立てを変改するという見解とは、相対立するかのようであって、

実はそうした観点の相違によると言えよう。

お わ り に

実証的に論を立て、それをつみ重ねていくことが、わたくしの関心・志向にほかならない。

したがって、かような文章をつづることは、はじめてだと言える。

ゆえに、かえって論をあいまいにするうらみなきやおそれる。また、秋山氏、清水氏はじめ諸氏へのご無礼を深くおわびしなくてはならない。

わたくしとしては、秋山氏・清水氏・石田氏らのご厚情・お導きに対し感謝以外の何ものもないのであるが、わたくしなりに、人物論の展望を持つと欲し、拙文をつづった次第である。御寛恕を乞うとともに、深く感謝申しあげたい。(昭和40年11月23日稿)